# 新任教師の成長と変容を支える同僚性
## ―埼玉県立新座高等学校の学校改革を事例として―

齋藤　智哉（國學院大學）

### はじめに

本稿は，第11回明治大学教育会・研究大会における第７分科会の報告である。本発表に関しては，その経緯について説明をしておく必要があるだろう。私（＝齋藤）は，1999年３月に本学法学部を卒業し，教育学の他大学の大学院へ進学した後，2006年10月から2008年３月まで本学において文部科学省「資質の高い教員養成推進プログラム（以下，教員養成GP)」の研究推進員を，明治大学研究・知財戦略機構ポスト・ドクターという立場で務めていた。端的に説明するならば，本学が文科省から助成金を得て，本学の教職課程のカリキュラム開発を行う仕事をしていたということになる。

また，教員養成GPの際に研究協力をお願いしていた金子奨教諭が，GP期間中に埼玉県立新座高等学校へ異動された。そして，金子教諭の異動と同時に2007年４月から始まった同校の学校改革の軌跡が,昨年春に『「協働の学び」が変えた学校　新座高校学校改革の10年』（金子奨・高井良健一・木村優編，大月書店）として上梓された。本発表は，同書の出版を踏まえて企画されたという経緯である。

なお，発表当日は，新座高校に初任で赴任し現在４年目を迎える村松英高教諭と，先に紹介した金子奨教諭の報告を受けて，私を含めた３人でディスカッションをし，最後に質疑応答を行った。本来であればそれらの全てを記録として残すべきであるが，紙幅の都合から，お二人のご発表のみの逐語的な文字起こしであることを，お詫び申し上げたい。しかし，臨場感ある内容になっているはずである。

本報告は，若い初任の教師がいかにして成長し，それを支えるベテラン教師も変容していくさまが如実に語られた貴重な記録だと言えるだろう。

### １．教員生活4年間の歩み（村松英高教諭／埼玉県立新座高等学校）

こんにちは。ただいまご紹介にあずかりました村松です。まずは簡単な経歴からお話ししたいと思います。私は埼玉県立川越高校を卒業し，2011年に東京学芸大学に入学しました。その後，2015年から埼玉県立新座高等学校に赴任することになりました。

埼玉県出身の方はお分かりかもしれませんが，新座高校はいわゆる「教育困難校」と言われる高校で，偏差値でいうと38という数字になっています。赴任前に，自分が在籍していた高校よりも遥かに偏差値的に低い学校ということを知り，全く想像のつかないまま教員生活をスタートすることになりました。ただ，私の中では授業を通じて「生きる力」を育てていきたいなという志を持ち，教鞭を執ることになりました。しかし，１年目に大きな挫折を感じることになりました。

私が思い描いていた教師像や授業像というものは，兄貴的な存在として生徒から頼られ

る存在になり，そして授業では，いわゆる「予備校講師」のような，生徒が教師の一挙手一投足に注目し，教師が言ったことをメモにとり，黒板に書いたことを丁寧に書き取り，というような授業でした。しかし，いざ自分が生徒の前で話をすると，理想とはかけ離れた現実が待ち受けていました。生徒は教師の話を聴いていない。授業中に勝手に出歩く者もいれば，後ろを向いて話をする者，酷い場合には隠れて携帯をいじったり化粧をしたりする。そういった現実が待ち受けていました。

しかし，私はそんな授業を何とか変えたいと思い，（いまこの場にいる）金子先生の授業をみさせていただきました。金子先生はほとんどの授業を，教壇に立って授業をすることなく，コの字型に教室の空間を変えて，各グループで問いを解決していくという協働学習を行っていました。それを私も見よう見まねで行ったわけですけれども，同じことをしているはずなのに，まったく生徒がのってこないわけです。グループワークをしたのに，「グループにして」って言った瞬間，なかなかグループにならない。机を動かさない。「ホワイトボードシートを使って，そこに分かったこと書いて」と言っても，そのホワイトボードシートを取りに来ない…といった状態でした。自分自身，すごく苦しかった覚えがあります。授業から逃げたくなるような日々を過ごし，１年目が終わりました。どこか自分の中で生徒が変わればもっと良い授業ができるんじゃないかと思いながら挫折をし，それを乗り越えられない自分のままで１年目を終えてしまいました。

そして２年目になると，１年生の担任を持つことになりました。担任を持つと，必然的に生徒から必要とされ，頼りにされる存在になるので，そういった意味では，すごくやりがいを感じる日々でした。しかし，授業の方はいっさい改善がされていない状態でした。ただ（生徒が）１年生ということもあり，授業は生徒が熱心に取り組んでいました。私にとっての悪い部分は，自分の中では見えなかった，あるいは見なかったというような状態で，２年目を終えました。

そして３年目に，自分自身大きな転機が訪れました。１年生から持ち上がりで２年生となり，生徒が中だるみの時期に入ったわけですが，私は世界史の授業を担当することになりました。初めて自分の専門科目である世界史を教えられるということで，自分の中では授業に対するモチベーションも高く，“あんなことを教えたい”“こんなことを考えさせたい”という一方的な気持ちがすごく湧いて授業を行っていました。しかし，こんなにも自分が教えたい，考えさせたいと思っているにもかかわらず，生徒から表出される言動というのは，まったく逆のものでした。生徒は難しすぎると音を上げて寝出す。ただ，１年目と違うのは，多少の信頼関係があったせいか，生徒も騒いだら申し訳ないという気持ちだったと思うのですが，授業中に寝るという行為によって，私の授業から逃避をしていました。生徒が求めているものは，担任として頼れることも大事ですが，やはりわかりやすい授業，考えることができる授業を求めていたんですね。しかし，生徒から表現されるものは，“先生の授業はそうじゃないよ”という姿でした。そこで私は原点に立ち返り，世界史の知識を生徒が身につけることも大事かもしれませんが，授業の中で生徒にどんな力をつけさせたいのかを考え，これから生きていく上で，考える力や表現する力を付けて欲しい

なと思い，それを実現するためにはどうしたらいいかを考えるようになりました。

そして，金子先生にその気持ちを打ち明けると，「授業では，僕は問いを立てさせてるよ」と話して下さいました。そこで私も，生徒に教科書を読んで「自分で問いを立ててごらん」と言うと，自分が普段生徒に投げかけている問いよりも興味深い，面白い問いが沸き起こってきました。それを実際に生徒にも解決させていくと，すごく面白い現象が起きて，自分もすぐに早く解決したい考えたいという生徒が出てきたんですね。嘘かと思うかもしれませんが，びっくりするくらい生徒が変わりました。生徒は本当に考えたいんだな，理解したいんだなという思いがすごく強いんだ，ということを実感した瞬間でした。

私の授業では，教科書・資料集以外に，教卓の前に色々な図書館の資料や他の教材を用意しているんですけども，生徒がどんどん取りに来るんですね。そして，その問いを何とか解決しようというようなことが起きました。そういった授業をやっていくと，当然テストはどうするのかということが生徒の中に出てきます。先ほど申し上げたとおり，生徒には考える力・表現する力を付けて欲しいと言っている以上，考えるテスト，表現するテストでなければいけないので，記述式を非常に多くしました。授業中に資料を沢山使って調べて言葉にしているのに，テストになったら自分の頭の中だけっていうのは，生徒からすると納得がいかないわけですね。丸暗記したほうがいいじゃないかとなってしまうので，テストも全て持ち込み有にして記述させる内容のテストにしました。そうすると，それまでのテストでは記述問題を出しても，私が板書に書いた記述そのまま書くだけなので，採点してて全然面白みもなかったのですが，持ち込み有にして記述問題を書かせると，すごく多種多様な生徒なりの言葉で表現しようとする姿が見れて，生徒に考える力・表現する力がついてきたなと感じるようになりました。すごく面白いと思ったことは，私は答案返却の時に，必ず一人一人に「今の授業どうだ」とか「世界史どうだ」とかいった教科の話をしながら50分なり40分なり使って返すのですが，問いを立てさせるようにしてから前で説明することをほとんどしなくなったんですけど，「先生の授業がわかりやすくなった」って言われたんですね。分かりやすい話をした覚えもないのに，生徒だけで考えさせて解決させてるのに，そういうふうに言われたことは，やはり教員の仕事って与えることもそうなんですけど，自分たちで主体的に考える場所を提供することがすごく大事なことなのかなって感じた３年目でした。

そして４年目です。いま４年目を迎え３年生を持っていますが，生徒の成長を実感し，考える力・表現する力がついてきたなと感じています。ただ，今も授業をしていて，やはりお互いに慣れが出てくると，成長が止まるなと思います。“あ，このままでいいな”と思った瞬間に，生徒もそうですし私自身も成長しなくなるなと感じています。そこで，今度はどんな力を付けたいかを考え，表現する力と似たようなものですけど，相手に説得力ある伝える力を付けたいという新たな課題を自分の中で持って，授業に取り組んでいます。そして４年目位になってくると，授業以外の教員としての役割も増えてきます。今は校務分掌のうちで進路指導部を担当してますが，授業以外の生徒指導やら保護者対応やらに多くの時間に割かれています。そうなるとどうしても，生徒や授業と向き合う時間が減って

くるんですけれども，やはり生徒にとって一番は授業が大事ですし，教員も生徒と一番時間を共有する授業が大事だと思いますので，そこは自分自身肝に銘じて，どんなに忙しくても授業から目をそらさずにやっていきたいなと考えています。

そして最後になりますが，この４年間で成長したという実感は全くないですが，この仕事というのは成果がないものなので，少しでも生徒の力になればという思いで色々変えながらやっています。その中で支えになったものですが，よく“熱意が大事だ”っていう話を聞きますよね。私も学生時代に聞いて，その熱意を持って教員になったのですが，それだけでは何も解決しないと思います。生徒に“ああさせたい”“こうさせたい”という一方通行ではなく，やはり生徒から返ってくるものを大事にして欲しいなと思います。

新座高校は困難校というだけあって，生徒が返してくれるものは，すごくストレートです。先生の話わかんない，つまんないという言語的なものから，グループワークになったとたんに寝てしまうといった，生徒から返ってくるものをいかに受け止めるか。それをマイナスに捉えるのではなく，どう改善していったらいいかを考えることが，自分を成長させてくれる材料になると感じています。さらに熱意だけを持ってというと，どうしても自分に閉じこもってしまうんです。弱さを出さずに，閉じこもってしまう。そうすると精神的に苦しくなってつぶれてしまうこともあるので，それを支える，お互いに支え合う同僚の存在も欠かせないかなと思います。私がすごく影響を受けた金子先生には，１年目のときに授業をたくさんみさせて頂いて，その中で授業のヒントをたくさんもらいました。また，自分が今こんなふうにしたいけど全然できないっていうような自分の弱さをさらけだせる空間が新座高校にはあったということが，すごく支えになってるなと思います。そういった方々と出会えたことが，自分にとって大きなものになってると思います。もちろん目の前にいる生徒が表現してくることは必ず自分にとって成長の糧になるものなので，そういうものを大切にしていくといいんじゃないかなと，いま私自身は思っています。以上が，４年間教員生活を過ごして感じてきたことです。ご静聴ありがとうございました。

### ２．若手教師をはぐくむ環境づくり（金子奨教諭／現・埼玉県立豊岡高等学校）

みなさんこんにちは。埼玉県立豊岡高等学校に勤務しております金子です。この３月まで新座高校に11年間勤めていました。僕は教員になって34年目になります。もう残された教員生活はあと数年。あと１回学年を持って，ちょっと休んで終わりかなというところにいます。

村松さんと３年間一緒にやってきて思ったことは，初任はみんなそうなんですが，スタートラインは自分の被教育経験だけなんですね。たいがい高校の教師をやる人たちは，社会的な中間層出身の人が多いわけですから，新座高校などに来ると，かなり強烈なリアリティショックを受けるわけなんです。それへの対処の仕方は二つあって，全て生徒のせいにする，“あいつらは育ちが悪いんだ”という子どものせいにするか，あるいは，そうじゃなくて自分に矢印を向けて，“いや自分の授業の仕方が良くないんじゃないか”と考えることができるかどうか。そこが分かれ目になっているように思うんですね。幸いなことに多く

の新座の初任の教員は，自分に矢印を向けることができていたようですけれども，自分が受けてきた被教育体験とは違うということをしっかりと認識すること，それから，日常のふるまいから言葉遣いから人間関係のつくりかた全てにおいて，自分とズレていたりとか，ブレていたりとか，そういったことを一つ一つ確認しながら気付いていくこと，自分の生き方が当たり前ではないと思うことが，どうしても必要なんですね。そういう違和感とか気づきみたいなものをしっかりとキャッチすることができなくて，ただなんとなく教師を過ごしていってしまうと，成長できないんじゃないかなぁと思うんです。

さらに学力問題というのは，貧困の問題とストレートにつながっておりますので，特に新座の若い教師が直面するのは，社会の抱えている格差と貧困の問題に他ならないわけですね。ですから，そこに自分のまなざしを深くおろしていくことができるかどうかというのも，すごく大事だろうと思うんですね。

僕が若い人たちに接する時には，何か違うなとか違和感があるなとか感じるものがあったら，それをすぐに解消するのではなくて，ずっとその違和感に堪え続け，違和感を持ち続けることで，すぐ言語化することなく大事にしようねって話をしてきたつもりです。あるいは，そういう自分を見せ続けてきていた，と言って良いかもしれません。それは今も変わらない。豊岡高校に行っても，同じように接しているつもりです。

でも，教師が一人で気づいていくのは，なかなか難しいんですね。教室は王国になりますので，いくらでも私物化できるし，見えないふりをすることはできるわけで。ですから新座高校では，教室に他者のまなざしを入れようということで，公開授業研究会を十年にわたって継続してきたということになります。

教師の気づきは，すぐ言語化できるものではないんですね。身体感覚として生まれてくる。それは例えば，学校行きたくないなという思いであったり，おなかが痛くなっちゃったり，頭痛がしたりという，そういうレベルから始まって，身体の中の違和として現れてくるものだろうと思うんです。自分ではなかなか言語化できないものを，他の教員が入ってきて，それを言葉ですくいとって，研究協議で形を与えていく。それを，公開授業研究会で，ずっと続けてきたということなんです。

さっき村松さんもおっしゃってましたけど，僕が思うのは，教師にとって一番大事なのは，子どもが触発してくるものをいかに受け止めることができるかという身体感覚だと思うんですね。子どもがこちらに向けてくるものは色々な形であるわけですけれども，それに初任が一人で気付いていくのは難しいから，「あの子はこういうことをつぶやいていたよ」とか「あの子はグループでこんな発言をしていたんだよ」とか，あるいは「先生にこういうメッセージを伝えたいような顔をしていたよ」のようなことを研究会で交流して，気づいているけどなかなか自覚できない，そういう子どもたちの触発してくるものに気づいていく，それが公開授業研究会なのではないかなと思うんです。

そうは言っても，教師にとってはたやすいものではなくて，学部教育であるとか大学院の教育で，教師はエキスパートとして育てられてきている。だから非常にプライドが高いわけですね。特に高校の教師はプライドが高くて，専門科目については他者の意見を容易

に受け容れないことがあるわけです。自分を守ろうとするわけです。

授業を公開するということは，教室をひらくと同時に，自分の身体をひらいていく，自分の弱さをさらけ出すって言うんですか…。そうすることによって，攻撃をうけやすいことにもなるんだけど，自分の身体感覚をヴァルネラブルな状態に置くことによって，他の教師からの支援とケアを引っ張り出す，あるいは子どもからの支援とケアを引き出すことになる。そういうヴァルネラブルな状態に自分を置くことが，とても大事なんだろうな。そうすることによって，教師の熟達に必須と言われているリフレクション（省察）をすることができる基盤が生み出されていくような気がするんですね。

村松さんは４年目なんですけど，もし，村松さんが豊岡高校に異動してくると，たぶん十年選手くらい経験を積んでいるように感じられちゃうと思うんです。豊岡高校は生徒がおとなしくて授業をよく聞いていますので，軋轢があったり，教師に暴言吐いたり，親からクレームがあったり，何時間も親と膝詰め談判するなんてことは，おそらく４年間ではないんですね。毎日毎日パーッと過ぎ去っていく。同じ４年間でも，そういう学校で過ごすのと新座高校で過ごすのと比較すると，そうとうな開きがあると思うんです。ですから新座高校の場合には，公開授業研も含めつつ，教師が適応的な熟達をする場がふんだんに用意されている。ところが受験勉強に特化してしまっているような学校の場合には，教師が定型的な発達しかできない状況に置かれてしまっているんだなという気がします。

同時にそれは，ベテランがベテランになれないって言うんですか。僕より年上の教員が何人もいて，体験はしてきているんですけども，それを経験化して，これは失礼な言い方なんだけど，ベテランになっていない。若手教師のことをバカにするだけで，若い教員と向き合おうとしない。やはり教員と言うのは，子どもと真摯に向き合う中で「教師」になっていく存在だろうし，たくさん体験を積んできた教員は，若手教員と真摯に向き合う中で「ベテラン」と言われる域に達するだろうと思うんですね。それは，大人が子どもによって親にさせられていくプロセスと全く同じで，世代が違う者同士がしっかり向き合う中で，お互いが成長を果たしていくんじゃないかなと痛感しているのが，この半年だったような気がします。そういう意味では，僕は新座高校で若い二十数人の初任を迎えてきたわけですけど，その若い教師と僕が向き合うことができて，僕は「ベテラン」の教師にさせられてきた。それは若い「教員」が僕によって若い「教師」にさせられていく，あるいは子どもによって「教師」にさせられていくプロセスと同時並行に生じていた出来事ではないかなと，いま改めて感じているところです。

## おわりに

村松・金子両先生のお話には，教師が成長するにあたって，初任もベテランも関係なく貴重で重要な視点と論点が示されている。参加者が一桁しかいなかったことが，何よりも残念でならない。私も含めた３人でのディスカッションと質疑応答を記録に残せなかったことも残念だが，両先生の語りから多くのことを学んで頂ければ幸いです。

# 学級担任ってなんだろう　～民間企業から教員へ～

花岡　真由子（大田区立安方中学校）

本講義は，２部構成である。第１部では，「花岡はどんな人？」というテーマで，自分について振り返りをし，第２部では「担任を通して」というテーマで，今年度担任になって感じたことや悩んだことを考察した。

就職活動の時期になると，大半の学生が自分の進路で悩む。それまでに何か目標を見つけ，「夢」といえるものがあればいいが，特別な思いもなく，なんとなく周囲と同じように就活をする，という学生も多いのではないだろうか。自分のやりたいことも分からないままに就活をし，進路が決まり，そして大学を卒業し，社会人となる。実は，私自身がそんな思いを抱えた一人だった。大学入学時に教職課程に申し込みをし，教職課程の授業を受け，単位も取得していたが，「教員になる」という強い気持ちがあったわけではなかった。将来の進路の選択肢の一つとして，そして大学で取得できる資格の一つとして，なんとなく，教職課程を取った。大学３年生になり，自分の進路について考えた時，３つの選択肢が頭をよぎった。「教員採用試験に向けて勉強する」，「教員免許は取得するが，現時点で教員にはならず，一般企業への就職に向けて就活を行う」，「将来教員になるつもりがないのなら，教職課程はここで止め，就活をする」。教職課程を取得している友人の中にも，似たような考えで悩んでいる人が多かったように思う。

そこで私が考えたのは第４の選択肢，「社会人を納得いくまでやってから，教員になろう」というものだった。教員免許さえ取得していれば，もし今後何かあって「教員になりたい」と思った時，教員採用試験に合格をすれば教員になれる。自分の強い意志さえあればいつでも教員になれる，と思ったのだ。ただ，そこには問題もあった。５月に地元で教育実習を行わなければならず，約３週間就職活動が出来なくなる。そのため，４月末までには内定を取り，安心して教育実習に行きたいと考えた。５月までに決まるだろうか…と，とても不安な毎日を送っていたが，不安要素はそれだけではなかった。どうしても行きたい企業があるとか，したいことがあるというわけではなかったので，企業で面接をするたびに軸がぶれ，就活は大苦戦した。そんな状態であったが，無事に４月末に金融企業から内定をいただき，安心して教育実習を行うことができた。教育実習中は本当に大変で，平日は毎日２～３時間程度しか睡眠をとることができなかった（私の要領も悪いのだが，とにかく授業準備に時間がかかった）。それでも，教育実習中は本当に楽しく，教員もいいなと考えたこともあった。だが，「今じゃなく，いつかでいいや。」という考えは変わらなかったため，そのまま金融企業に就職をした。

１社目では，金融商品の営業職を担当した。お客様のお宅を訪問し，現在所有している商品のアフターサービスを行い，新しい商品の紹介や切り替え，最終的には新規契約を獲得する，という内容だ。上司や同僚にも恵まれ，ワークライフバランスも充実していた。しかし，その会社は２年半で退職をすることとなった。理由は「英語を使って仕事がした

い」と思うようになったからだ。外国籍のお客様の家を訪問したり，接客したりする機会もゼロではなかったが，年に１件あるかないか位で，勤務中に英語を使うことは皆無に等しかった。「なんで就活の時に気づかなかったのだ」と言われればそれまでだが，就活の時はそんなことを思いもしなかったから，仕方ない。その後，英語を使って仕事ができる企業に絞って転職活動をし，航空会社に転職をすることができた。

２社目では，毎日英語を使う機会があった。主な仕事内容は成田空港でのグランドスタッフ業務。チケットの発行や手荷物預かり，搭乗ゲートでの業務や到着時のクレーム対応など，多岐にわたる業務内容だった。働き始めた頃は「これで毎日英語が使える！」と思い，本当に毎日嬉しかったのを今でも覚えている。

転職してちょうど１年経ったころ，大きな転機が来た。新入社員の教育担当を任されたのだ。まだ２年目の社員であったし，自分の知識に自信もなかったため，「なんで私が…」という思いが強かったが，任されたからには精一杯やり遂げようと思い，快諾した。それからは，後輩たちの教育担当として，「どうすれば後輩たちが分かりやすいか，どうしたらしっかりと内容が伝わるか」を必死に考え，日々仕事を行った。「この子たちの未来は私の教育にかかっている！」と信じ込み，分かりやすいように図でまとめたり，実際にあったケースをロールプレイングしてみたり，とにかく後輩の教育に力を注いだ。

そんな中，自分にある思いが芽生えるようになった。「人に何かを教え，相手が理解し，分かった！という表情が見られることは，こんなに嬉しいんだ！後輩にもっと分かりやすく教えてあげたい！」という思いだった。今思えば，この思いこそが教員を志す原点だったのかもしれない。ほどなくして，「自分は人に何かを教えることが好きで，自分にも合っている気がする。引き続き英語を使うことができるなら，そろそろ教員を志してもいいかもしれない」と考えるようになり，通勤時間や休日を利用して教員採用試験の勉強を始めた。そして，転職して２年目の秋，無事期限付き採用として名簿登載が決まり，２社目も２年半で退職をした。

そんな紆余曲折を経て，社会人になってから６年目の春，晴れて教員になることができた。大田区立安方中学校の１学年・副担任・英語科だ。それまで「新卒で教員になる人が多い」と考えていた私にとって，６年もブランクがある自分がしっかりやっていけるのか，本当に心配だった。しかし，蓋を開けてみると，校内の英語科全員が民間企業での職歴有り。不安は一気に解消された。

教員生活１年目は，本当にあっという間に過ぎた。初めて教壇に立ったとき，40人弱の生徒の眼差しが一斉に私に向けられ，汗が止まらず，話す内容も飛んでしまい，本当に緊張していたことを今でも覚えている。教員１年目は覚えることも多く，毎日が全力疾走で本当にあっという間に過ぎた。

次年度，２学年副担任となった。副担任の仕事にもだいぶ慣れてきて，「自分が担任だったらどうするか」を考えながら仕事をしていたように思う。各クラスの学活を見学し，学年行事の際は全クラス応援をした。副担任の時しか得られないことをしっかりと学び，自分の今後に繋げようと考え，いろいろな経験をさせていただいた。そのお陰もあってか，

その年の３月末，人事異動が発表され，「１年２組担任」を命じられた時は，不安もあったが「やっと担任になれる！」という嬉しい気持ちの方が大きかった。

そして今年度，教員生活３年目にして初の担任となった私は，周囲の先輩，上司，管理職に様々なアドバイスや手助けをいただき，日々担任業務を行っている。そんな中で，副担任時代には分からなかった，担任ならではの悩み（考え）が見えるようになってきた。それは，大きく分けて３つ。「信頼関係の大切さ」「生徒理解と同時にクラスの秩序を守ることの難しさ」「特別扱いを好む」ということだ。ここではこの３点について，私が考える解決策を示していきたい。

**まず，1つ目の「信頼関係の大切さ」について。**

副担任をやっていた頃は分からなかったが，想像以上に担任は自分のクラスの生徒への指導が多い。もちろん，副担任の先生や他学年の先生方も指導することはあるが，自分のクラスの生徒に何かあったとき，真っ先に飛んでいくのも担任の大切な仕事であろう。しかし，毎日一緒にいる時間が長い分，自分のクラスの生徒指導には特に熱が入ってしまうことが多い。そして，そんな場面で戸惑うことがたまにある。それは「指導をすることで，この生徒との信頼関係が崩れるのではないか」という思いが，ふと頭をよぎることがあるのだ。「厳しい指導をする担任は嫌いだ」と，その生徒からそっぽを向かれるのではないか，それによって今後のクラス経営が上手くいかなくなるのではないか…この心配は，初めて担任になった先生が抱えやすい問題だそうだ。私も例外なく，その問題に悩まされた。

と，ここで疑問に思うのは，じゃあ，なぜ自分のクラスの生徒と信頼関係を結ばなければいけないのかということだ。もちろん，クラス全員と信頼関係が結ばれている状態は最高だが，煙たがられる状態でも，クラス経営がしっかりとできていれば，学級崩壊にはならないのではないか。私はその疑問を，尊敬する大先輩にぶつけてみた。すると，「信頼関係がないと，指導や助言をしても響かないし，反感を買うだけ。大人でも，もし，初対面の人に急に怒られたら，戸惑いと同時に相手に対して怒りが沸いてこない？」という答えが返ってきた。なるほど，そういうことか…妙に納得したことを今でも覚えている。信頼関係を築くことは，学校現場にとっていかに大切か，改めて気付かされた瞬間だった。

**次に，「生徒理解と同時にクラスの秩序を守ることの難しさ」について。**

学校現場では，色々なトラブルが起きる。そしてこれは実際に起こったケースである。自分のクラスに，精神的に不安定で気分の浮き沈みが激しい女子生徒（ここではＡと呼ぶ）がいる。ある日，その生徒とクラスの女子（Ｂ）がトラブルになった。トラブルの原因を作ったのがＡだったので，当然Ａに対する指導を念入りに行わなければならないのだが，ここで私は迷ってしまった。「もしＡに指導をして，精神的に参ってしまい明日から不登校になったらどうしよう。しかし，だからと言ってＡに対して甘い指導をしたら，Ｂやこの件を知っている周囲の生徒は納得しないのではないか…」Ａの生徒理解が深い分，どう指導したらいいのかが分からなくなってしまった。

この問題の重要なところは，Ａ・Ｂ・クラス生徒それぞれに丁度良い加減で指導をし，Ａに対してはＡへの理解も示しつつ指導を入れ，クラス内の秩序も守るということである。実際，生徒の数だけ指導方法があり，それぞれの生徒に合った指導をおこなうことも重要であるため，ＡにはＡに合った指導を行い，ＢにはＢに合った指導を行った。想像以上に，生徒は周りを見ているし，色々なことを知っている。今は中学生のほとんどが携帯電話を持っている時代で，四六時中情報共有は可能である。先生の耳に届いたころには，学年全員が知っていたというケースも少なくない。だからこそ，バランスよく個々に応じた指導で，全体の秩序を守ることも大切なのである。よく，学級経営を「縦の糸」と「横の糸」に例えることがある。縦の糸は，「安心・安全な環境，集団の秩序」，横の糸は「生徒理解・信頼関係」。縦の糸をしっかり張っておきながら，横の糸を上手に通していく。どちらかが緩んでいたり，曲がっていたりすると，綺麗にならない。そしてその絶妙な加減が，学校現場には求められているのだ。

**最後に，「特別扱いを好む」について。**

これは，私の前職にも大きく関わってくることなのだが，営業をやっている時，キラーフレーズと呼ばれる，相手の心を大きく揺さぶる言葉を教えてもらった。それは「あなただけ，特別ですよ」という言葉だ。お客様は，とにかく「特別」という言葉に弱かった。実際に特別な契約を行うわけではないのだが，「特別感」というものを感じてもらえるように，色々と工夫はしたつもりだ。「普通が良い，みんなと同じが一番」という考えが一般的ではあるが，心の奥底では「自分だけ特別扱いされたい」という思いがある人の方が圧倒的に多いように思う。

そしてこの考えは，まさに現職にも繋がっていた。担任の仕事の一つに，保護者対応がある。面談はもちろんそれ以外で相談を受けることもあるし，けがや病気の報告，生徒指導後のアフターフォローの電話など，様々な理由で保護者と接する機会がある。そして当然のように，保護者との接し方は，生徒との接し方と全く異なる。保護者は「大人」であり，人生経験もあり，善悪の判断もつき，ある意味教員と同じ立場にある。そのため，生徒と接するとき以上に丁寧に，相手への理解を示しながら接していく必要がある。そして何より，親は自分の子どもが一番可愛いし，一番大切だ。これは当然のことである。だからこそ，「みんなと一緒」よりも「うちの子だけ特別扱い」して欲しい気持ちがある（もちろん全くない保護者もいる）。実際，そういった依頼も少なくない。しかし，だからといってその生徒だけ特別扱いすることはできない。身体上の問題などで配慮が必要な場合は別だが，生徒は皆平等であり，公平性を保つことは絶対である。そのため，保護者に対しても，相手の気持ちを汲み取りつつも，平等に接していかなければならない。これも，我々担任の大切な仕事である。

担任の仕事は，本当に奥深い。だからこそ，日々面白いと感じる。自分自身少し遠回りはしたが，民間企業での経験も確実に今の仕事に役立っている。なぜなら，担任になって

感じたこととして挙げた３つの悩みは，全てが民間企業で働いていた時にも当てはまる内容であったからだ。「自分がしてきたこと，経験したことは決して無駄じゃない。」学生の皆さんも，ぜひ強くそう思って欲しい。今後，もし何か遠回りをしてしまったとしても，絶対に自分にとって大きな肥やしとなるはずだ。皆さんの将来が素晴らしいものになることを，心より願っている。